

## 海老沢達郎の教養講座

### 第6回 映画で楽しむ異文化理解—『風と共に去りぬ』について（その1） —『風と共に去りぬ』とアイルランド人— (2021年9月15日)

今回も映画についてお話ししたいと思います。今回は、日本人でも多くの方がご存知の映画『風と共に去りぬ』を、標題についてお話し致します。今回はスペースの関係と『風と共に去りぬ』が約3時間50分の長編映画でありますので、「映画の粗筋」は割愛いたします。DVDで映画を見ながら、また、映画を思いだして読んで頂けたら、より理解できるものと思います。映画『風と共に去りぬ』は原作者がマーガレット・ミッチェル（Margaret Mitchell）、監督がヴィクター・フレミング（Victor Fleming）、主演がヴィヴィアン・リー（Vivien Leigh）とクラーク・ゲーブル（Clark Gable）で、1939年制作・公開のテクニカルカラーのアメリカ映画です。第12回アカデミー賞で、作品賞、監督賞、主演女優賞（ヴィヴィアン・リー）、助演女優賞（ハティ・マクダニエル）、脚色賞を含む10部門で受賞した名作です。スカーレットの乳母を務めて、マミー役を好演したハティ・マクダニエル（Hattie McDaniel）はアフリカ系アメリカ人として初めての受賞です。『風と共に去りぬ』は次頁の表のようにAFIの「映画ベスト100」（2007年）の第6位にランクされております。また、マックス・スタイナー（Max Steiner）作曲のテーマ曲「タラのテーマ」（Tara's Theme）も素晴らしいテーマ曲だと思います。ベスト10の作品の中で、皆さんのお好きな映画はありますか。私は第2位の『ゴッドファーザー』も好きな映画の一つです。それに、テーマ曲の「愛のテーマ Love Theme from the Godfather」もいいですね。



AFI's 100 years... 100 movies —10th Anniversary Edition  
The Greatest American Film Of All Time

順位	映画名	監督	主演	公開
1	<i>Citizen Kane</i> 市民ケーン	Orson Welles オーソン・ウェルズ	Orson Welles	1941
2	<i>The Godfather</i> ゴッドファーザー	Francis Coppola フランシス・コッポラ	Marlon Brando	1972
3	<i>Casablanca</i> カサブランカ	Michael Curtiz マイケル・カーティス	Humphrey Bogart Ingrid Bergman	1942
4	<i>Raging Bull</i> レイジング・ブル	Martin Scorsese マーティン・スコセッシ	Robert De Niro	1980
5	<i>Singin' in the Rain</i> 雨に唄えば	Gene Kelly Stanley Donen ジーン・ケリー スタンリー・ドーネン	Gene Kelly Debbie Reynolds	1952
6	<i>Gone with the Wind</i> 風と共に去りぬ	Victor Fleming ヴィクター・フレミング	Vivien Leigh Clark Gable	1939
7	<i>Lawrence of Arabia</i> アラビアのロレンス	David Lean デヴィッド・リーン	Peter O'Toole	1962
8	<i>Schindler's List</i> シンドラーのリスト	Steven Spielberg スティーヴン・スピルバ ーグ	Liam Neeson	1993
9	<i>Vertigo</i> めまい	Alfred Hitchcock アルフレッド・ヒッチコ ック	James Stewart Kim Novac	1958
10	<i>The Wizard of Oz</i> オズの魔法使い	Victor Fleming ヴィクター・フレミング	Judy Garland	1939

AFI's 100 years... 100 movies —10th Anniversary Edition を参考にして作成

映画『風と共に去りぬ』は、南部ジョージア州のアトランタ周辺を舞台に、南北戦争前夜、南北戦争勃発（1861年4月12日）アトランタ炎上・陥落（1864年9月2日）、南北戦争敗北（1865年4月9日）、南北戦争からの復興を生き抜いた一人の女性（スカーレット・オハラ）を中心として描いたスケールの大きな長編映画です。今回は「『風と共に去りぬ』とアイルランド人」に焦点をあて、お話し致します。

最初に、『風と共に去りぬ』の原作者マーガレット・ミッチェル（1900年—1949年）の家系についてお話し致します。マーガレット・ミッチェルの母方の曾祖父フィリップ・フィッツジェラルド（Philip Fitzgerald、1798年—1880年）はアイルランドからの移民で、ジョージア州クレイトン郡ジョーンズボロ近くに奴隷を抱えた農園を所有した人物です。娘（マーガレットの祖母）のアニー・フィッツジェラルドが、やはりアイルランドからの移民のジョン・スティーブンス（John Stephens）と結婚。その子供のメイベル・スティーブンス（マーガレットの母）がマーガレットの父となるユージーン・ミッチェル（Eugene Mitchell）と結婚致します。このように、先ず、母方の家系がアイルランドからの移民（父方の家系はスコットランドからの移民です）であることを頭に覚えておきましょう。（[https://en.wikipedia.org/wiki/Margaret\\_Mitchell](https://en.wikipedia.org/wiki/Margaret_Mitchell) を参考）

次に、アイルランドに“Hill of Tara”（タラの丘）という丘がダブリンの北のミース州にあり、ここは古代アイルランドの王（The Highest King of Ireland）の戴冠式が行われ、また祭礼の中心となっていた場所です。1691年にアイルランド島全体をイギリス（イングランド）が植民地化し、1801年にはアイルランドはイギリスに併合され、1922年の独立までイギリスの支配を受けることになりました。イギリスの支配を受けたアイルランド人にとっては、「タラの丘」は精神的支柱であり、神聖な場所であったと考えてよいでしょう。こういう理由から、母方がアイルランド系のマーガレット・ミッチェルは、主人公のスカレットの父ジェラルド・オハラが所有した土地に、「タラ」という架空の名前を付け、曾祖父のフィリップ・フィッツジェラルドが所有していたジョーンズボロの農園の比較的近いころにところに、「タラ」という場所を設定したことになります。

小説では、ジェラルド・オハラはアイルランドで、オレンジ党員の地代取り立て人（オレンジ党とはプロテスタント優位主義の組織のことで、地代取り立て人とは、ロンドンなどに住んでいる不在地主に代わって、小作人から地代を取りたてる仲介人のことです）を喧嘩で殺害し、アメリカにいる兄を頼って逃亡（1822年、21才の時）し、その後、賭博（ポーカー）で賭けられた「農園の権利書」を獲得し、「タラ」に農園を開き、その後才覚を発揮し、奴隷100人を抱える農園主になりました。妻のエレンはジョージア州サヴァナ（大西洋岸の港町）の出身で、元フランスの貴族の血を引く家柄となっています。「殺人を犯してアメリカに逃亡し、ポーカーで農園を獲得した」とは、映画ではさすがに全く触れておりません。

では、映画を見ていきたいと思います。映画の冒頭部分で、ジェラルド・オハラ（トーマス・ミッチェル）が娘のスカーレット（ヴィヴィアン・リー）に

ジェラルド：土地こそがこの世の中で価値がある唯一のものだ....土地は永遠に続く唯一のものだぞ。（”Why, land is the only thing in the world worth ... because it’s the only thing that lasts.”）。

スカーレット：まあ、お父様、アイルランド人らしい話しね。（“Oh, Pa, you talk like an Irishman.”）。

ジェラルド：アイルランド人であることが、私の誇りだ。お前も半分アイルランド人の血が流れているんだぞ、忘れるな。（“It’s proud I am that I’m Irish. And don’t you be forgetting, Missy, that you’re half Irish too.”）

と話し合っている場面があります。映画では、この場面で初めて、ジェラルド・オハラ（当時 60 才）がアイルランドからの移民で、アイルランド人にとっては一番価値のある土地を取得し、大農園を所有した人物であることが分かります。ジェラルド役のトーマス・ミッチェルもアイルランド移民の子として生まれております。

また、家族が夕食前のお祈りの時間の中で、エレン（バーバラ・オニール）が

エレン：..... 願わくは、聖母マリア様....（...Therefore, I beseech the Blessed Mary, even Virgin...）。

（英文は DVD「風と共に去りぬ」（ワーナー・ホーム・ビデオ）の英語字幕より引用）

とお祈りしています。「マリア様」という言葉を使用していますが、映画では、オハラ家がカトリック教徒であるとは触れておりませんが、この言葉により、初めてオハラ家がカトリック教徒であることが分かります。それは、マリア様信仰がカトリックの強い特徴だからです（アイルランド人だからといって、カトリック教徒とはかぎりません）。

南北戦争が始まり、南軍は天下分け目の「ゲティスバーグの戦い」（1863 年 7 月）で敗北し、北軍が優勢となります。その後、北軍がアトランタを攻撃・占領し、シャーマン将軍による海への進撃で、大西洋岸までの各地を焼き払って行きました。アトランタにいたスカーレットも、レット・バトラー（クラーク・ゲーブル）の協力を得て、炎上しているアトランタを馬車で脱出（映画のクライマ

ックスの一場面です) し、途中でレット・バトラーと別れ、義妹のメラニー (オリヴィア・デ・ハヴィランド) とメラニーの生まれたばかりの赤ん坊と奴隷のプリシーの4人で、馬車でタラ屋敷に向かいます。ついに、タラに到着すると、スカーレットは「無事だったわ、屋敷は燃えていない！」と屋敷の無事を確認し、「お母様、お母様、お父様」と叫んで家に走って行きます。しかし、妻のエレンが昨夜、腸チフスに感染して死亡 (南部人は貧乏白人を軽蔑しておりましたが、エレンは貧乏白人の女性を看護し、感染) し、呆然と立ちつくしているジェラルドと再会します。タラ屋敷に残っていた奴隷のマミー (ハティ・マクダニエル) が出てきて、「屋敷は北軍の司令部として使用され、しかも、貴重なものは全て北軍に略奪されました」と話します。その中に、エレンがお祈りの時に使用していたロザリオも含まれていました。ロザリオはカトリック教徒が聖母マリアへのお祈りを繰り返し述べる時に使用する十字架をつないだ数珠様の輪のことで、エレンが大事にしていたものだと思います。高価なものだったかもしれません。エレンは映画の冒頭場面から一貫して慈善活動に熱心で、敬虔、高潔なカトリック教徒として描かれております。そして、100人いた奴隷が僅か3人になり、何もなくなって、食べる物さえないタラ屋敷の畑で、スカーレットは、「神様に誓います」 (“As God is my witness,”) と述べ、「私は決して負けません。絶対に生き抜いてもう二度と家族の誰一人も飢えさせません」と言い、更に、「嘘をつき、物を盗み、人を欺き、人を殺しても、私は決して二度と飢えません」 (“If I have to lie, steel, cheat or kill, I’ll never be hungry again. “) と、父のジェラルドから受け継いだと思われるアイルランド魂で、人生を生き抜いていくことを誓います。ここで、映画の前半が終了です。(英文はDVD「風と共に去りぬ」(ワーナー・ホーム・ビデオ)の英語字幕より引用)

小説の中で、私が疑問に思った二つのことを取り上げたいと思います。何故、マーガレット・ミッチェルは主人公 (スカーレット) の父のジェラルド・オハラを、「アイルランドで、オレンジ党員の地代取り立て人を喧嘩で殺害し、アメリカに逃亡した人物」に設定したのでしょうか。このことは前から疑問に感じていましたが、私なりに考えてみました。それは、イギリスからの侵略により、アイルランド人の土地は取り上げられ、1700年 (全島の植民地化の後) までには、アイルランド人が所有していた土地は国土の僅か14%だったと言われております。オレンジ党はプロテスタント (英国国教会)、地代取り立て人はイギリス人を指し、イギリス人及びイギリスから搾取され、苦難に耐えていた小作人であるアイルランド農民の苦悩の叫びを「オレンジ党員の地代取り立て人殺害」として描き、マーガレット・ミッチェルは、当時のアイルランドの政治的・社会的状況を読者に伝えたかったのではないのでしょうか。更に、アイルランドでは、

1845年から1850年まで続いた「ジャガイモ飢饉」ではアイルランド人約100万人が餓死や病気で亡くなりました。アイルランド存亡の危機でした。このジャガイモ飢饉の時にアイルランドからアメリカに渡ったアイルランド人は150万人以上と言われております。恐らく、着の身着のままにアメリカに渡ったことでしょう。

さて、アメリカに渡ったアイルランド人たちには、どのような生活が待っていたのでしょうか。次の疑問は、この問題と関連があるのですが、「ジェラルドが賭博（ポーカー）で得た『農園の権利書』で、農園所有者となり、最終的にタラに奴隷100人を抱えた大農園を所有したと」というのも、地代取り立て人殺人事件と同様に、私には、腑に落ちない設定になっています。着の身着のままにアメリカに到着した人々はその日の生活を営むことさえ大変だったことでしょう。アイルランド人の男性たちは、工場労働者、鉄道工事労働者、港湾労働者、鉱山労働者など、厳しい肉体労働の仕事が多かったようです。ロナルド・タカキ氏の「多文化社会アメリカの歴史」によると、「アメリカを訪れたアイルランドのマイケル・バックレー牧師は、ヤンキーたちはアイルランド人を『働くために創造されたもの』とみなし、『労働が必要な場合、荷馬車馬と同じ様にアイルランド人を雇うのだ』と述べた。あるアイルランド人労働者は回想して、地下を掘るのが、『いかに厳しい』労働であったか、『星が出ているうちに起き、暗くなるまで働いたこと』、『アメリカ人のための奴隷として馬のように働かされたこと』に言及した」とあります。（鍵括弧内は、ロナルド・タカキ「多文化社会アメリカの歴史一別の鏡に映して」富田虎男監訳、明石書店、1995年より引用）

このようにアイルランド人たちは新天地アメリカでも、とても厳しい生活を余儀なくされました。こういう事情を考えると、アイルランドからの移民一代で、マーガレット・ミッチェルの曾祖父フィリップ・フィッツジェラルドのように奴隷を抱えた農園を所有することは極めてまれなことであることが分かります。ジェラルドはジョージア州サヴァナで商売をしていた兄二人の仕事を手伝っていましたが、その仕事の稼ぎでは到底農園を持てるわけありません。そこで、マーガレット・ミッチェルは、アイルランド人に農園を持たせるために、ジェラルドが賭博（ポーカー）で「農園の権利書」を獲得し、農園主に設定したのではないのでしょうか。小説には、「ポーカー、競馬、決闘の作法、ヤンキー（ここでは、北部の人たち）嫌い、奴隷制度擁護、綿花、白人の屑（貧乏白人のことで、英語ではwhite trashといいます）を軽蔑すること、婦人への大仰な礼儀作法、嗜みタバコ、ウィスキー好きなどは、南部人が好む思想や習慣だった」という記述があります。これは、まさに異文化理解の世界ですね。こうして、小説で

は、ジェラルド・オハラはアイルランドからアメリカに逃亡し、アメリカで富を得た人物として描かれました。マーガレット・ミッチェルの曾祖父のフィリップ・フィッツジェラルドとジェラルド・オハラはほぼ同じ時期にアメリカに渡ったと思われます。マーガレット・ミッチェルの家系も含めて、小説、映画でもアイルランド人がキー・ワードになっています。今回はここまでといたします。次回の第7回では、「『風と共に去りぬ』とクー・クラックス・クラン」を中心にお話しする予定です。

(参考文献：マーガレット・ミッチェル「風と共に去りぬ」荒このみ訳、岩波書店、2015年)